

大空 (生徒・保護者向け) 60号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和4年1月28日(金)

あるレジ打ちの女性の話

□本日の概要

- つまらないと思っていた仕事でも、主体的に取り組むようになると全く違った世界が見えてくる。
- 自分が直面している課題が、乗り越えるべき試練なのか、回避すべき困難なのかは、当事者は分からない。そのためにも他者の助言が必要である。
- 他者とのコミュニケーションが人を支える。辛い仕事も、他者との交流があり、他者の喜びが見えるようになるとやりがいを持つ。
- 自分が他者のために何ができるのか分からないが、悩んだときは原点に立ち返って欲しい。
- 本日のNFC 感性 主体性 自他肯定力 協働力

□あるレジ打ちの女性の話

ある女性の話をします。この話は、「涙の数だけ大きくなれる！」(木下晴弘2008年 フォレスト出版)という本に掲載されているものの要約です。(YouTubeにも動画版があります)

彼女は、何をしても「続かない」人でした。田舎から、都会の大学に進学し、サークルや部活などにも参加しましたが、すぐに、「自分にあっていない」などと言ってやめてしまうのです。

そんな彼女も就職の時期が来て、最初はメーカー系の企業に就職します。ところが、彼女は仕事が続きません。勤め始めて3ヶ月もしないうちに上司と衝突し、やめてしまうのです。次に入った物流の会社も、自分が予想していた仕事とは違うという理由で、やはり半年ほどでやめてしまいます。次は医療事務でした。しかし、彼女は、「この仕事じゃない」と言ってやめてしまうのです。

こういうことを繰り返すと、どうなると思いますか。皆さんは就職の際には、履歴書を書いて提出することは知っていると思いますが、履歴書には、「〇〇会社入社、〇〇会社退社」という経歴が、ずらりと並ぶようになります。こうなると、「豊富な経験を積んでいる」などとは思ってくれません。「仕事の続かない人」と認識され、なかなか正社員に雇ってくれる会社が見つからなくなるのです。ついに、彼女はどこに行っても正社員として採用してもらえなくなりました。だからといって、生活があります。田舎の両親は早く帰って来いと言います。しかし、彼女は負け犬のようで帰りたくありません。

結局、彼女は派遣会社に登録しました。ところが派遣も勤まりません。すぐに派遣先の社員とトラブルを起こし、嫌なことがあればその仕事をやめてしまうのです。彼女の履歴書にはやめた派遣先のリストが長々

と追加されていきました。

ある日、彼女に新しい仕事の紹介がきました。スーパーでレジを打つ仕事でした。

「レジ打ち」という言葉は、今や死語となろうとしています。現在は、レジは、商品のバーコードをセンサーにかざせば良く、数字の入力は必要ありません。しかし、昔はテンキーで商品の値段や種類を打ち込まねばならず、多少はタイピングの訓練が必要な仕事でした。ところが、勤めて1週間もするうちに、彼女はレジ打ちに飽きてしまいました。「私は、こんな単純作業のためにいるのではない」と考え始めたのです。とはいえ、今まで転職を重ねてきて、我慢の続かない自分にも嫌になっていました。もっと頑張らねば、もっと耐えなければならないと本人にも分かっている、でもどうしても続かないのです。

彼女は辞表を書きました。しかし、提出する決心がつかず、迷っていた時、ちょうどその時、田舎のお母さんから電話があります。「帰っておいでよ」受話器の向こうからお母さんの優しい声が聞こえてきました。

彼女は迷いが吹っ切れます。彼女はアパートを引き払ったら、その足で辞表を提出に行こうと、部屋を片付け始めます。あれこれ段ボールにつめていると、机の奥から一冊のノートが出てきました。

それは、小さい頃に書き綴った大切な日記でした。なくなったと思い、探していたものでした。パラパラとめくっているうちに、「彼女はピアニストになりたい」と書かれているページを発見したのです。そう、彼女の小学校時代の夢です。「そうだ、あの頃、私はピアニストになりたくて、練習を頑張っていたんだ…」

彼女は思い出しました。なぜかピアノの稽古だけは長く続いていたのです。彼女は心から夢を追いかけていた自分を思い出し、日記を見つめたまま本当に情けなくなりました。

「あんなに希望に燃えていた自分が今はどうだろうか。履歴書にはやめてきた会社が並ぶだけ。自分が悪いのは分かっているけどなんて情けないんだろう。そして、私は、また今の仕事から逃げようとしている。」

彼女は日記を閉じ、泣きながらお母さんに電話します。「お母さん、私、もう少しここで頑張る」

一旦は、レジ打ちをやめる決意をしていた彼女ですが、昔を思い出し、気持ちを変えます。「私は、練習を重ねてピアノが弾けるようになった。ピアノの鍵盤を見ずに、両手で弾くことができる。私流にレジ打ちを極めてみよう。」

翌日から、彼女は、ピアノを弾くような気持ちでレジに向かうようになりました。レジには、数字だけで

なく、商品ごとに打つボタンがたくさんあります。それらの配置を、見ずに打てるようになるように体にたたき込んだのです。そうして、目を重ねるうちに、キーボードを見ずに、猛スピードで入力ができるようになったのです。

すると、これまで、レジのボタンしか見ていなかった彼女に、違うものが見えるようになったのです。

まず、お客さんの様子が見えるようになりました。「このお客さんは、昨日も来ていた。」「ちょうどこの時間帯に子供連れで来るお客さんだ。」とか、様々なことが分かるようになったのです。これは彼女の密やかな楽しみになりました。

すると、どんどんお客さんの様子がインプットされるようになります。指は、ピアニストのようにレジの上を動きながら、「この人は、店が閉まる前に、値下げされた商品を買う」「この人は安いものしか買わない」ということまで分かるようになったのです。

そんなある日、いつも期限切れ直前の、安売り処分品ばかりを買うおばあちゃんが、5000円もするタイのお頭付きをかごに入れてレジに持ってきたことがありました。彼女は思わず驚いて、おばあちゃんに話しかけます。「今日は、何かいいことあったんですか？」すると、おばあちゃんは、彼女に笑いかけて言いました。「孫が、スポーツ大会で賞をとったお祝いなんだよ。」彼女は、思わず「おめでとございます」と笑顔で声をかけました。

お客さんとコミュニケーションを取ることが楽しくなったのは、これがきっかけです。そして、彼女はレジに来るすべてのお客さんの顔と名前を覚えるまでになりました。

「〇〇さん、今日はこのチョコレートですか。でも、今日はあちらに、もっと安いものがありますよ。」「今日は、マグロよりカツオがいいよ」などと、声をかけるようになりました。お客さんとコミュニケーションを取り始めた彼女はいつしかこの仕事が楽しくなってきたのでした。

そんなある日のことでした。「今日はすごく忙しい」と思いながら、彼女はいつものようにお客さんとの会話を楽しみながらレジを打っていました。すると、店内放送が響きました。「本日は混み合いますして申し訳ありません。どうぞ空いているレジにお回り下さい。」

ところが、わずかな間をおいて、また放送が入るのです。「本日は混み合いますして申し訳ありません。重ねて申し上げますが、どうぞ空いているレジの方へお回り下さい。」

そして、3回目、同じ放送が聞こえてきたとき、初めて彼女はおかしいと気づき、周りを見回して驚きました。どうしたことか、5つのレジが全部空いているのに、お客さんは自分のレジにしか並んでいなかったのです。店長があわてて駆け寄ってきて、レジに並んでいるお客さんに言います。「どうぞ空いているあちらのレジにお回りください。」すると、お客さんはこう答えたのです。

「いいのよ、私はここに買い物に来ているのじゃない。あの人としゃべりに来てるんだ。だから、このレジじゃないと嫌なんだ。」

その瞬間、彼女はワッと泣き崩れました。そして、

彼女は泣き崩れたまま、レジを打つことができなくなりました。

彼女は、仕事というのは、これほど素晴らしいものだとして初めて気づいたのです。この瞬間、彼女は何をやっても続かなかった昔の自分ではなくなったのです。

彼女は、その後、そのスーパーのレジの主任になり、新人教育を担当するようになりました。彼女から教えられた、スタッフは、仕事のすばらしさを感じながら、お客さんとコミュニケーションをとるようになったということです。

口主体的に取り組むこと

この話を読んで、私は、「主体性」の重要性を再認識しました。単にレジを打つという単純な仕事でも、自分が主体的になり、前向きに取り組もうとすれば、全然違う世界が見えてくる。また、あきらめずに、こつこつと続けていけば、ちょっとしたきっかけで、大きく飛躍する時が来るのではないのでしょうか。

もちろん、人権を無視するようなブラック企業などで、理不尽な忍耐をしたり、耐えがたいようなことにも耐えろという意味ではありません。しかし、どんな進路に進んでも、必ず人生には「試練」があります。その試練に対し、自分の意思で、主体的に乗り越えようと思うかどうか大切です。他者から命じられただけの業務は、どんな内容でも苦痛かもしれません。

ただ、自分が直面している問題が、立ち向かうべき試練なのか、それとも回避すべき困難なのかという見極めは簡単ではありません。大きすぎる困難の場合、それを避けるというのは懸命な判断だからです。高い山に登ればいいというものではなく、引き返す判断も大切です。しかし、これは、当事者はなかなか分からないものです。特に、真面目な人ほど悩みがちです。だから、困ったり、苦しんだ時は、他者のアドバイスをもらい、客観的な助言をもらうことが大切です。

口他者とのコミュニケーション

また、他者とのコミュニケーションが人を支えます。どんな仕事でも、他者との交流があり、他者の喜びが見えるようになると、やりがいを持てるようになります。給料はもちろん大切ですが、他者のために生きている、その実感が持てるということが、人を支え、伸ばしていくのでしょうか。

他者のためといっても、それは簡単ではありません。他者のためになるためには自分を高める必要があります。そのために努力が必要です。しかし、「他者のため」という目標がある努力は苦痛ではありません。

自分が他者のために何ができるのか、簡単には分かりませんが、自分が得意なこと、好きなことを続けることが、ひょっとしたら他者のためになるのかもしれない。

皆さんも、幼い頃、自分の夢を書いたノートなどがあったはずです。私も、小学生の時の日記を持っており、涙のシミがあつたりします。その横に、先生の赤ペンのコメントがあり、今振り返ると、多くの人に支えられていたことが分かります。今も、迷った時、自分の原点に立ち返り、そっと、昔の思いを汲むことがあります。皆さんも自分の原点に立ち返ってみませんか。